

## 觀念法門の性格に就て

廣 瀬 杲

### 一

善導の五部九卷の著書は、從來より本疏と具疏とに分たれ、前者を教門と呼ぶ時には後者を行門と言ひ、前者を安心門と呼ぶ時には後者は起行門と云ひ做わされて來ている。

そして、これに對する研究も既に幾多の先輩によつて精密に行われて來ていたのである。而し、これ等の研究は、多くの場合本疏に重點が置かれて、ややもすれば具疏に對する考察が輕んじられる傾きがあつた様に思われる。

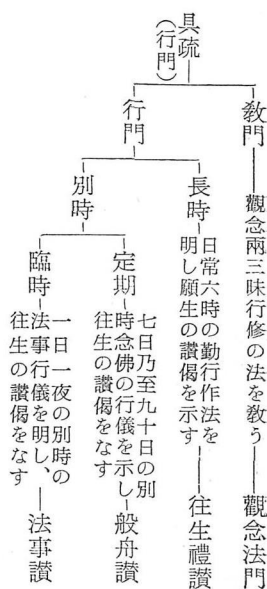
勿論、善導教學の中核をなすものは本疏、即ち觀經疏である。或いはその教學の樞要は、既に本疏を見る事に依つて充分了解し得るとすら云い得るであらう。こうした意味に於て、その研究が比重的に本疏に傾く事も、亦

當然とも考えられる。併し亦、それと同時に具疏の有する性格、及びその意義と云うものが、正しく了解されないならば、善導教學の立體的な理解を得ることは出來ないであらう。

この試論に於て私が試みんとする事は、こうした觀點に立つて、從來より具疏の隨一として見られて來た、「觀念法門」の性格及びその意圖する所を考察する事により、この書の善導教學中に於ける位置を窺つて見たいと思うのである。

### 二

一應、從來から多くの先輩により行われて來た、四部の具疏に對する分類を顧ると、大體次の如くなる様である。



以上は總括的な分類に過ぎないが、而しこうした夫々の書の性格附けが、從來からの見方であると考えられるし、亦恐らく妥當な性格附けであろう。後世に至つて、法事讃が佛事勤行の規範となり、亦禮讃が後世長く佛事にあつて誦詠せられる様になる事も、夫々の書自體の性格に依るものである。

亦、往生禮讃、法事讃、般舟讃の三書に對して、觀念法門だけは特種な意圖をもつて著されたものであると云う事は、從來より一應注意せられて來てはいる事であるが、果して單に信後の報恩行としての觀佛三昧と念佛三昧との行法、並びにその功德を教うる所の書であると云う事を以て、この書の性格を充分に知る事が出来るであらうか。勿論、この書の説相の上からは、そうした行修の法を説くと云う事を看過することは許されない。併し

乍ら此の書の意圖する所は、唯それのみに止まるものではなく、そこにはより重要な意義が含まれている事を推察し得る様である。

確かに一應は他の具疏と同じく、修道者の實踐法が説かれてはいるが、更に注意深く考察するならば、むしろそうした實踐法的意義は、この書の一面であつて、眞に意圖する所は、それを通して觀無量壽經の教意を具體的に領受せしめんとするものである事が窺知せられて來る。それ故むしろこうした意味に於ては、直接本疏の意義と對應して考察すべき性格をもつものの如くである。

### 三

觀無量壽經の玄意を領解して、それに對して詳細な註解を施したものは、言う迄も無く四帖疏である。それは當時の支那佛教界に於ける大きな課題の一つであつた觀無量壽經の諸問題を一舉に遮斷してその眞意を闡明し、この經に對する從來の觀念主義的な偏見を打破せるものであつた。併し四帖疏は決して單なる觀經の註解書ではない。それは善導自らの生命を試金石とする事に依つて、その上に教の眞實義を開顯したものであつて、それ

故に第一義的には對他的な註釋を述べんとするものではなく、善導自ら何處迄も自己を「機」として「法」を明かにした苦闘の歴史を物語るものと言えよう。それは菩提心の上に立つ嚴しき歩みに於て、遂に眞實なる教に遇い得た感激を以て貫かれてゐる。それ故、觀經の文々句々を精密に解譯したものであり乍らも、その書の全體を通して、讀者に無限の感銘を與えるのは、決してその註解の妙ではなく、全く懺悔と讃仰との交流する表白的な響きである。即ち遇い難き法に遇い得た讃嘆と、法に遇うことに依つて、始めて内に照見せしめられた「曠劫來流轉」の自性への懺悔であり、この「教」に遇うた「機」として「法」を明らかにせんとする一點が、當時の教界の觀經に對する一切の問題を斷ち切つて、觀經をして表には「專念彌陀佛名經」として、亦内には「三心經」として、この經の位置を確立し得たのである。

以上の如く四帖疏は第一義的には何處迄も善導の表白の書であつて、決して啓蒙の書では無いのである。併しその事は亦單なる獨白録だと云う事を意味するものではない。むしろ啓蒙的な作意性を含まないと云う同一の理由の故に、純粹なる自信教人信の書として、一切の偏執を破つて、教の眞意を全教界に公開し得たのである。

「願使<sup>クハ</sup>含<sup>シメ</sup>靈<sup>ラ</sup>聞<sup>シテ</sup>之<sup>ヲ</sup>生<sup>ジ</sup>信<sup>ヲ</sup>。有<sup>ラ</sup>識<sup>ヲ</sup>觀<sup>シテ</sup>者<sup>ニ</sup>西<sup>シテ</sup>歸<sup>セ</sup>以<sup>テ</sup>此<sup>ニ</sup>功<sup>ヲ</sup>德<sup>ヲ</sup>廻<sup>シ</sup>施<sup>ス</sup>衆<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>悉<sup>シテ</sup>發<sup>シ</sup>菩<sup>ヲ</sup>提<sup>心</sup>慈<sup>心</sup>相<sup>ヲ</sup>向<sup>フ</sup>佛<sup>ニ</sup>眼<sup>ヲ</sup>相<sup>ヲ</sup>看<sup>ミ</sup>菩<sup>ヲ</sup>提<sup>ヲ</sup>眷<sup>ヲ</sup>屬<sup>ヲ</sup>作<sup>ニ</sup>眞<sup>ニ</sup>善<sup>ニ</sup>知<sup>ト</sup>識<sup>ト</sup>同<sup>ニ</sup>歸<sup>ニ</sup>淨<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>佛<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>義<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>請<sup>テ</sup>證<sup>ス</sup>定<sup>ス</sup>竟<sup>ス</sup>。一<sup>ニ</sup>句<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>加<sup>ス</sup>減<sup>ス</sup>欲<sup>ハ</sup>寫<sup>シ</sup>者<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>經<sup>法</sup>應<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>」

と云う跋文の言葉は、この書の性格を如實に物語るものであらう。それは觀經を語るに餘りに純粹であり、餘りに高貴であると言わねばならない。

善導をしてかかる觀經の領解をなさしめた内因は、飽く迄も自らの内に燃える菩提心であるが、その外縁となつたものは當時の教界に於ける觀經解釋であつたであらう。それ故強いて言うならば、その内因面を主として觀經を註解したものが四帖疏であるとすれば、その外縁面を表として教意を明かにせんとしたものととして、此の觀念法門が位置づけられるのでは無いであらうか。かかる意味から觀念法門を實證的觀經疏と呼ぶ事が出来る如く思われる。

四帖疏に於ては自らの自證を鏡として、觀經の全文にわたり、詳細な解釋をなした善導が、觀念法門に於ては全く觀經の説相を直接に受けて、特にその正宗分の説相に乗じて實證的に教意を明らかにせんとした理由を、次

の如きことの上にも窺いうるのでは無いであらうか。

即ち善導が四帖疏に於て開顯した觀經義は、經の當相から見る時には、決して正當な理解とは考えられず、それ故に論理的には恐らくその儘では理解され得るものではなかつたであらう。加うるに當時の支那佛教界の最高權威者達が、こぞつて觀經に對する巧妙な釋義を發表している唯中にあつては、善導の觀經義はその儘では決して肯ぜられ得るものではない。その問題の中心となるものは、經の正宗分を如何に領解するかにある。それ故に善導は敢て當時佛教界の通說である所の、觀佛三昧經としての觀經觀に應同して、その實踐性を表に説く事に依つて、最も具體的に本疏に於て開顯した獨自な經の玄意を領受せしめんとする意圖をもつて、この觀念法門が著されたのでは無いかと推察せられる。それ故この書は本疏と異り、全體から受ける感覺は非常に啓蒙的な響きをもっている様に思われる。こうした點に於て、此の書は實踐法を説くと言う事に於て具疏の一でありつつも、同時に他の三書とは明らかに性格を異にするものを持つてゐるのである。

以上の如き推察のもとに、この書を注意して見て行く時、それを確證する如き多くの點を所々に見出し得るの

である。

#### 四

先ず最初に注意せられる事は、その卷頭と卷尾に置かれてゐる題號である。

卷頭には「觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門一卷」とあり、卷尾には「觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門經一卷」と「經」の一字を加えてゐる。本疏の中、玄義分の釋名門に示されてゐる「佛說無量壽觀經一卷」と云う經題の解釋を見るに、

「佛說無量壽觀經一卷、言佛者、乃是西國、正音。此土名覺。自覺覺他覺行窮滿名之爲佛。乃至言說者口音陳唱。乃至言無量壽者、乃是此地漢音。言南無阿彌陀佛者。又是西國正音。乃至故言歸命無量壽覺、此乃梵漢相對其義如此。今言無量壽者是法覺者是人、人法並彰故名阿彌陀佛。又言人法者、是所觀之境、即有其二。一者依報、二者正報云々。」

と述べられてゐる。この特異な經題の解釋を以て、觀念法門の題號を照考する時「觀念阿彌陀佛相海三昧功德法

門一卷」とは、正しく善導の獨自な解釋によつて、觀經の經題をそこに顯示したものであると言ふことが窺われる。觀經一卷の所明は、正しく彌陀の依正二報莊嚴を照觀する三昧と功德とを説くより外には無いであらう。更に卷尾に置かれた「經」の一字は、觀念法門そのものが觀經を明らかにする外ない事を示しているものと見てよいであらう。この題號の上にも既に觀念法門の性格が窺われる。

更に内容を推考して行くことにより、次第に明らかになつて來ることであるが、觀經の説相に依つたと云ふことは、當時の教界の觀經觀に應同した事でもあるが、それを通して教意を闡明して行くと言ふことは、むしろ觀經それ自體の意圖する所に順ずる事である。かかる觀經の深き意圖を洞察し、その經の意圖に順い得るものは、唯如來の大悲善巧を自身に領受し得た人のみであらう。この様に觀經そのものの意圖に順つて説かれる觀念法門こそは、明かに實證的觀經疏である。

## 五

更に觀念法門の内容に就て推考するならば、既に先輩に依つて、注意せられている如く、それは三段に分れて

いる。その第一段は正しく觀佛、念佛兩三昧の行法が説かれ、第二段にはその三昧の功德利益としての五種増上縁の義が示され、第三段ではそれを受けて、三問答を以て、信謗の得失、念佛功德の超勝性、懺悔滅罪の法を説きつつ、以て稱名念佛を勸勵しているのである。かかる三段の分科は動かせない所であるが、唯そのことを以て一概に、四帖疏では未だ觀佛念佛兩三昧の行法及びその利益に關する説述が不充分であつたから、今それを詳説して行法を教えんとする爲に、この觀念法門が説かれたのであると云あうとする事は、聊か早急な結論の如く考へられる。

先ず第一段を見るに、そこには經の正宗分に順じて、觀佛念佛兩三昧の法が説かれている。それは始めて置かれた標列に於て「依觀經明觀佛三昧法一」、「依般舟經明念佛三昧二」と示されている如く、觀佛三昧法を説くには觀經の所説を觀佛三昧海經の文を以て助成し乍ら明し、次いで般舟三昧經に依つて念佛三昧法を明らかにしている。即ち二經を以て觀經正宗分の説相を明らかにしているのである。

玄義分の宗體釋によつて明らかにされている如く、善導の觀經觀は、

以<sup>テ</sup>觀佛三昧<sup>ヲ</sup>爲<sup>シ</sup>宗<sup>ト</sup>、亦<sup>チ</sup>以<sup>テ</sup>念佛三昧<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>宗<sup>ト</sup>。一  
心廻願<sup>ニシテ</sup>往生<sup>ニ</sup>淨土<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>本<sup>ト</sup>。

と云うにおさまる。本來一經に二宗を立てると云うことは矛盾したことであり、あり得ない事である。その矛盾を取て犯して一經に二宗を立てたことは、決して一經に二宗ありと云わんが爲ではなく、むしろ眞に一經一宗を明らかにせんが爲であつた。

觀經を直接に一經一宗と見ようとするのが、諸師の立場に於て見られた釋迦教觀佛三昧經としての觀經觀である。そこでは觀經の獨自性は全く無視せられてしまつてゐる。一經に兩宗を立てずしては、眞に一經一宗の義を明らかにし得ない所にこそ、この經の獨自な性格が存するのである。即ちこの經の一經一宗と云う事は、釋迦彌陀二尊教として先ず二宗を確立することに依つてのみ知ることが出来るのである。玄義分序題門に、  
釋迦<sup>ハ</sup>此方<sup>ニシテ</sup>發遣<sup>シ</sup>彌陀<sup>ハ</sup>即彼國<sup>ヨリ</sup>來迎<sup>ス</sup>彼喚<sup>イ</sup>此遣<sup>ル</sup>。豈容<sup>ケシヤル</sup>不<sup>レ</sup>去<sup>カ</sup>也。

と語られる所にこそ二宗を立てる善導の意があるのであり、その發遣と招喚の二尊教は、後に宗祖により洞察せられてゐる如く「定觀成就の益は、念佛三昧を獲るを以て觀の益となす」と云う意に於て始めて一宗に歸するの

である。觀佛三昧を説くことは、飽く迄經の正宗であつて、それ自體決して假説せられたものでは無い。觀佛三昧を以て正宗とすると云うことは、當然その成就を明らかにするものであるが、そこに於て問題となることは、觀佛三昧の成就とは如何なる事であるかと云う一點である。

端的に云うて觀佛三昧成就とは、鏡中に自己の面像を見るが如く、了々分明に見佛する事の外には無い。そのことは觀經の中の所々に散説せられてゐる如くである。即ち任運無作なる見佛に於て、觀佛三昧は成就するのであり、觀佛三昧の作意性は任運なる見佛三昧の内に完全に消解され切る事により、自らを満足する。その見佛とは本來念佛三昧の内容である。これを宗祖は、  
言<sup>ハ</sup>於現身中得念佛三昧<sup>ト</sup>、即<sup>チ</sup>是顯<sup>ス</sup>下定觀成就<sup>ノ</sup>之益<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>獲<sup>ル</sup>念佛三昧<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>觀益<sup>ト</sup>。  
と説示せられたのである。

ともあれ、一經兩宗と云うことは、並列的に兩三昧を見て、その一方を取捨することでは無く、何處迄も經の獨自性を守つて一經一宗の教意を明らかにせんとするものである。

以上の如く兩三昧を以て一經に兩宗を立てる意義を、

經の説相に従つて積極的に明らかにせんとする所に、觀念法門第一段の意圖があると考えられる。

既に見た如く、經の正宗分中の觀佛三昧法を示すには、觀佛三昧海經の説を以て觀經を補い、亦經中に散説されている念佛三昧法を明かすには、般舟三昧經の説を以てした。この事に就ての從來の解釋は、觀經は正宗分に觀佛三昧を説きつつ、而もその行法を示すのに不充分であり、亦念佛三昧法に就ては殆ど説かれ無かつたが爲に、今それらを明らかにせんとして、二經の所説に依つたのである、と説明しようとする様であるが、むしろそうした事に先立つて、既に着眼して來た如き、この書の意圖を、具體的に示すものとして二經の引用の意義を考へべきでは無いであらうか。

然らば觀佛三昧海經の所説に依つて、觀佛三昧法を説く一段は、確かに具體的に佛身觀、佛土觀が示されている。即ちその佛身觀に於ては、佛の頂上相より次第に三十二相を觀すべき事を詳説しているのであるが、その詳細な所説を通して浮き彫りにせられて來るのは、その觀法そのものより、その所觀の佛身とは光明所成の外なきことである。そしてその光明所成の佛身は、自然に大悲なる佛心を憶想せしめるのである。これこそ正しく、

#### 觀經眞身觀の

以<sub>レ</sub>觀<sub>ニ</sub>佛<sub>ニ</sub>身<sub>ニ</sub>故。亦見<sub>ニ</sub>佛<sub>ニ</sub>心。佛<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>者大慈悲是との説の積極的な説示に外ならない。

その大いなる光明の象徴たる佛身相の中で、殊に詳細に示されているのは舌相であることは注意すべきではなからうか。即ち、

次<sub>ニ</sub>想<sub>ヘ</sub>舌<sub>ヲ</sub>薄<sub>ク</sub>廣<sub>ク</sub>長<sub>ク</sub>柔<sub>ク</sub>輒<sub>ニ</sub>舌<sub>ヲ</sub>根<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>二道<sub>一</sub>津液注<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>咽<sub>ニ</sub>筒<sub>ニ</sub>直<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>王<sub>ニ</sub>佛<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>紅蓮華<sub>一</sub>開<sub>ニ</sub>而不<sub>レ</sub>開<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>合<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>八萬四千葉<sub>一</sub>葉葉相重<sub>一</sub>一<sub>ニ</sub>葉<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>八萬四千脈<sub>一</sub>一<sub>ニ</sub>脈<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>八萬四千光<sub>一</sub>一<sub>ニ</sub>光<sub>ニ</sub>作<sub>ニ</sub>百寶蓮華<sub>一</sub>一<sub>ニ</sub>華<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>一十地菩薩<sub>一</sub>身皆<sub>ニ</sub>金色<sub>一</sub>手持<sub>ニ</sub>香華<sub>一</sub>供<sub>ニ</sub>養<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>王<sub>ニ</sub>異<sub>ニ</sub>口<sub>ニ</sub>同<sub>ニ</sub>音<sub>ニ</sub>歌<sub>ニ</sub>讚<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>王<sub>ニ</sub>行者等作<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>除<sub>ニ</sub>滅<sub>ニ</sub>罪<sub>ニ</sub>障<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>無量功德<sub>一</sub>。

と。舌相とは如來金口の説法を象徴するものであらうが、その説法の内面性を物語る心王の相は、如來華座の莊嚴、更には廣く依報の莊嚴を想起せしむべく現されている事は、何と意義深いことであらうか。こうした所に觀佛三昧の祕密を窺知し得る如く思われる。以上の様に推考して來る時、この一段は觀佛三昧の行法を説くと云う事よりも、むしろその所觀の境たる彌陀の依正二報莊

嚴の意義を明らかにせんとするものの如くである。即ちそれは遂には所觀の佛を盡十方無碍光如來として、亦その土を無量光明土として領受せしめんとすることにつきる如く窺われる。それ故、觀佛三昧海經を以て助顯したこの一段も、觀經正宗分の十三觀をより具體的に明かしつつも、遂にその歸を一にするものと云えよう。

然らば何故に觀佛三昧海經の所説を借りて迄して、明らかにせねばならなかつたのであらうと云うに、それは單に觀經の所説を詳示する爲と云うに止まらず、積極的には次の般舟三昧經所引の意圖に對應するものであると見ることが出来る。

般舟三昧經の引用は、觀經の當相にあつては尙不明瞭でありつつ、而も所々に散説せられて來た念佛三昧法を現わそうとするものであるが、諸師の觀經理解に立つならば、それは當然定心念佛と見られるのであるから、念佛三昧とはその行相から云う時には、觀佛三昧の中に包まれるものであり、その果位から見れば、見佛と云う意味に於て觀佛三昧の成就相としての境位として考えられるのであつて、こうした立場に立てば、それを直ちに稱名念佛と見ることの出来ないのは、むしろ當然のことである。併し善導の立場からすれば、かかる見方は全く經

の玄意に觸れ得ぬ所論である。然らば經の當相からすれば、諸師の説は一應妥當性をもち、教意に觸るればそれは全く無意味な戲論となつてしまふのである。こうした重要な問題を解かんが爲に、觀經の上にあつては明確性を缺く念佛三昧の意義を、般舟三昧の所説に依つて明瞭にしたのである。それ故般舟三昧經の所説は、第一段中最も重要な位置を持つてゐる。

その經説に依れば、般舟三昧即ち念佛三昧とは「十方諸佛悉在前立三昧」と示され、その三昧行こそ「菩薩超衆行」の法たることを語つてゐる。本來念佛三昧とは、それを因行に就て云う時には觀想念佛と稱名念佛とに分かれ、それを果位に就て見れば、禪定に入つて佛身を現生し、實相と相應する所の三昧發得の義である。般舟三昧經はその念佛三昧の因行を詳説するものである。それ故、この經は先の觀佛三昧海經の所説の後を受けて、觀經の念佛三昧を具體的に示し、諸師の念佛三昧に對する謬解を正すに最も適切な經であつたと云えよう。若しこの場合、直接に專稱念佛を説く阿彌陀經の如き經を以てするならば、却つて觀經の説相に依つて説意を明らかにせんとする此の書の意圖としては、不適當であつたであらう。ともあれ般舟三昧經の文を引いて、その行法を説



こうとする事は、觀經の説相に離れることなく、當時の教界の觀經義を覆えして、

上來雖説定散兩門之益、望佛本願、意在衆生一向專稱彌陀名。

と云う玄意を開顯する事となるのである。

般舟三昧經は念佛三昧法を次第に説きつつ、如法修行持戒完具、獨一處止念西方阿彌陀佛、今現在彼隨所聞當念去此十萬億佛刹、其國名須摩提、一心念之一日一夜、若七日七夜過七日已後見之云々

と勸めて遂に三昧發得する事を示す。そしてその三昧成就の見佛とは、

作是念時、諸佛境界中、諸大山、須彌山、其有幽冥之處、悉爲開避、無所蔽礙。

ものである。然もそれは、

四衆不持天眼、徹視不持天耳、徹聽不持神足、到其佛刹、不下於此、間終生彼、間上便於此坐見之。

と示されている。即ち、行者の神通力等を否定することは、正しく觀佛行の作意性が消解した任運無作なる境地を説示せんとするものである。唯、

於此間、國土、念阿彌陀佛、專念故得見之。のである。まことにそれは一七日の一心專念なる三昧中の見佛である。併しその見佛の處に於て、經文は一の問答を示している。即ちその問答はこれ迄説かれて來た釋迦の説法を切斷する如くに、彌陀直爾の聲として示されて來る。それは當面定中の佛の聲である。その問答は、即問持何法得生彼國、阿彌陀佛報言、欲來生者、當念我名、莫有休息、即得來生。とある。ここに至つて明らかに此の經の念佛三昧は「當念我名」なる報佛の聲に應ずる專稱佛名に歸するのである。この問答が念佛三昧發得たる見佛の内景として説かれてゐる事は、見佛とは正しく「專ら彌陀の名を稱せよ」との報佛の聲を直爾に聞く事なるを示しているものである。それは「稱我名字」なる本願に遇う事を象徴しているに外ならない。亦、それ故に見佛とは「即得往生」の外なきことを示すものであらう。

ここに至つて善導が本疏に於て明らかにした

一心專念彌陀名號、行住坐臥不間、節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼佛願故。

と云う義が此の書の上に於ても具體的に確立せられた。

善導が第十八願を加減して示し得た場合は、決して理念の世界では無く實踐の大地である。その實踐性を強調する觀念法門に於て、それがかかる形に於て明らかにせられて來た事は重要な意義をもっており、この爲にこそ般舟三昧經の文を引用せられたのである。これから顧みる事により、先に觀佛三昧海經をもつて觀佛三昧法を説きつつ、そこに所觀の佛土を如實に領知せしめんとした意圖も領かれるであらう。この事は更に第二段を見る事に依つて明かにせんとする事であるが、善導教學の本質問題である。「觀察」と「稱名」との關係を既に暗示している様である。

ともあれ、ここに

本誓重願不<sub>レ</sub>虛、衆生稱念必<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>往生<sub>一</sub>。

の確證を得た。ここに至り念佛三昧の見佛とは、諸師の義とは全く袂を別つて「當念我名」なる報佛の聲に應ずる。念佛往生の義として明らかにせられた。殊に注意せしめられる事は、この報佛との問答の前後にある釋迦の證誠勸勵の言葉である。即ち問答の直前には

專念故得<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>。

とあり、直後の文には  
專念故得<sub>ニ</sub>往生<sub>一</sub>。

と示されている。釋迦の説は彌陀の本願を間にして、「得<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>佛<sub>一</sub>」は「得<sub>ニ</sub>往生<sub>一</sub>」の外なき事を證誠勸勵する如くである。

仰<sub>ニ</sub>惟<sub>一</sub>釋迦、此方發遣、彌陀、即彼國來迎、彼喚<sub>ニ</sub>此遣<sub>一</sub>、豈容<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>去<sub>一</sub>也、唯可<sub>ニ</sub>勤心<sub>一</sub>奉<sub>ニ</sub>法<sub>一</sub>畢、命爲<sub>ニ</sub>期<sub>一</sub>、捨<sub>ニ</sub>此穢身<sub>一</sub>、即證<sub>ニ</sub>彼法性之常樂<sub>一</sub>。

と云う二尊一致の境界は、ここに至つて明瞭に示される。先に善導の一經兩宗義は、二尊二教を通して二尊一致の一宗を宣明せん爲であつたと述べた事は、ここに於ても明らかになつた様である。

ともあれ釋迦の念佛三昧の教説の深意は、この彌陀との問答により「當念我名」の本願に隨順する稱名念佛に外ならぬ義なることが確立せられた。以上が般舟三昧經を引用しての念佛三昧法を示す一段の意義である。

第一段中次には別時念佛の行法、平生及び臨終の懺悔發願の法が説かれているが、これは恐らく現代の我々が奇異に感ずる如きものでは無く、むしろ當時の佛教徒にとつては、當然要求さるべき事であつたのでは無からうか。こうした處にこの書の實證的な特徴が見られるのであつて、こうした點を押えて行修法を教える書であるとのみ考へる事は、妥當な見方では無いであらう。

以上觀念法門の第一段の所説を概観して來たのであるが、行法を説くものとのみ言われて來た第一段が、決して一面的な行修の勸勵をのみ目的とするものでは無く、本疏に於ける經の正宗分の領解を積極的に開示せんとするものであり、それにより當時の教界の觀經理解の觀念主義を破らんとする意圖を窺う事が出來た様である。

## 六

以上の如き第一段の所説に對する考察は、更に第二段の五種増上縁の説を見て行く事により、より確實なものとなるであろう。この五種増上縁の所説こそ、前段の意圖を確定づける最も重要な意義をもつものであり、細部にわたつて見て行くならば、恐らく數多くの問題が見出されるのであろうが、今はそうした詳細な考究をなす暇がない、唯概括的にその要點を見て行きたいと思う。

この五種増上縁の説は、往生禮讃にも略説せられているのであるが、從來は之を、禮讃に於ては明らかに稱名念佛の利益として説かれていのであるが、觀念法門にあつては、それが觀佛念佛の兩三昧を教うる書なるが故に、そこに示される五種増上縁説も兩三昧の益として述べられているのであつて、禮讃のそれとは直ちに一とは

云われぬと解釋している。併しこれは、此の書の當相にのみ注意して、全體的な意義を了解しなかつたが爲の結論であり、既に見た如く善導の一經兩宗説が、決して並列的に兩三昧を立てたので無いと云うことが明瞭であるならば、この五種増上縁説も一點に集注せられて、唯一行の利益を説く外ない事が知られる筈である。

さて、第二段は前段の歸結を受けて、  
依<sup>テ</sup>釋迦<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>教<sup>ス</sup>、六<sup>ノ</sup>部<sup>ヲ</sup>往<sup>シ</sup>生<sup>ス</sup>經<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>顯<sup>ス</sup>明<sup>ス</sup>稱<sup>ス</sup>念<sup>ス</sup>阿<sup>ニ</sup>彌<sup>ニ</sup>陀<sup>ニ</sup>佛<sup>ヲ</sup>願<sup>フ</sup>生<sup>ス</sup>淨<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>現<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>得<sup>テ</sup>延<sup>ス</sup>年<sup>ヲ</sup>轉<sup>ス</sup>壽<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>遭<sup>フ</sup>九<sup>ノ</sup>橫<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>難<sup>ニ</sup>。

ものである。既にこの言葉の上からも、次下に説かれる五種増上縁説が、稱名願生者の利益を説く外なきことは、ほぼ知られる所である。そこには、滅罪、護念、見佛、攝生、證生の五種の利益が説かれているが、それらは稱名の利益として第三の見佛増上縁に攝まることは、前段の所説から見ても知られる。

先ず第一の滅罪増上縁の説を窺うに、最初に下三品の滅罪が示され、その後に定善觀の滅罪が説かれている事に注意せられる。これは善導の觀經觀が下三品、特に下々品の十聲稱佛の上に立てられている事を、如實に物語るものであり、人間の無始以來の有漏雜染性が、十聲稱

佛により轉成滅罪せられて行くことを示さんとする所にこそ、この經の玄意があると云うことを、最初に明らかにしているものであつて、これが五種増上緣説の全體の底流となるものであり、亦同じ滅罪増上緣の諸説も、此處に歸するものであらう。

第二の護念増上緣も諸經の文に依つて、九文に分れてゐるが、その中心は亦、

身相等光、一一遍照十方世界、但有專念阿彌陀佛、衆生、彼佛心、光常照是人攝護不捨、總不論攝餘雜業行者。

と云う眞身觀の光明攝取の文にある。經の上では唯「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」とのみ説かれてゐるものを「但有專念」と云い、「總不論照攝餘雜業行者」と規定してゐる事により、護念の益も亦、專稱彌陀名の行者が蒙むる光明攝取の外なきことが示されてゐる。この點に就いては、善導は他の書の上にも常に強調する處である。

而もこの滅罪と護念とは、次の見佛三昧増上緣の外には無いのであつて、見佛三昧増上緣こそは、五種増上緣の性格を決定し、それを歸一せしむる一點と云う事が出来る。その所論は第二段中最も詳細を極めてゐるが、要

するに觀經に顯される處の「見佛得忍」の問題を明らかにするの外には無いであらう。それ故にその中心となるものは、華座觀より眞身觀に至る一連の文である。

少しくその所説を窺つて見るに、先ず華座觀の文と像觀の「是心作佛是心是佛」の文とを以て一文とし、次には更に像觀の文を二つに分つて二文とし、次に眞身觀の文を以て一文となしてあり、明らかにこの四文が中心と見られる。

善導にありては、  
言眞正報者、即第九眞身觀是也

と説かれてゐる如く、眞身觀の佛こそは因願酬報の眞報佛である。然らば華座觀より眞身觀へかけての文は、正しくその眞報身の義を顯わさんとするものである。この一段は本疏の上に於ては、最も重要な問題となつてゐる處であり、諸師の説と眞正面から對立する點である。即ち華座觀に顯はれた空中住立の佛こそは、眞身觀に於て華座上に立ち給う眞身佛なることを顯示せんとするのであり、その佛こそ亦「法界身」として「一切衆生の心想中に入り」給う處の佛である。その佛が華座の上に立ち給うことは「法藏比丘願力所成」なる華座上に立つ事であり、即ち本願酬報の佛たることを象徵してゐるもので

ある。更に言えば、かかる因願酬報の眞報佛を了々分明に見ると云うことは、亦本願に順ずる處の稱名に於てしかあり得ないのである。因願酬報の眞佛は、唯「順彼佛願」の稱名の上に自然に顯現するものであり、その意味に於て眞報佛とは順彼佛願の稱名の内景と云う事が出来るよう。

ここに至り第一段に於て諸師の説を破して、見佛を稱名に歸結した善導の所論は、更に明らかにせられた。そしてそれを證誠する文として、經の流通分に依る一文と般舟三昧經に依る文及び文殊般若經の文が置かれてゐる。その流通分に依る文には、

阿彌陀佛三力外加、致使下凡夫念者乘自  
三心、力故得見佛、至誠信心願心爲内  
因、又藉彌陀三種願力、以爲外緣、外内因  
緣和合故、即得見佛云々

と説かれており、端的に佛の願力と自の三心との因縁和合により見佛すると示すのであるが、此處に見佛得忍と云うことの性格を知る事が出来るのである。即ち見佛とは三心必具の稱名に於てのみある事實であり、三心必具の稱名とは乘佛願力の外には無い。それは具體的には光明攝取の事實の外に見佛は無い事を示すものであらう。

思うに此の一文は、宗祖が行卷に述べられる處の兩重因縁の文の一の規をなしているものであらう。その眞實信業識、斯則爲内因、光明名、父母斯則爲外緣、内外因縁和合得證報上眞身。との文は、單にその形式のみを寫したもので無く、善導の文を徹底せしめたものである。それ故にこそ、宗師言、以光明名號攝化十方、但使信心求念、又云念佛成佛是眞宗、又云眞宗匠遇也可知。

と結ばれたのである。即ち光明名號の攝化の外に見佛の事實を求める事は、此處に於ては一切否定されねばならない。これこそ善導の眞意である。その事を明らかにするものこそ、文殊般若經の一行三昧の文であらう。この一行三昧の文は亦禮讚にも引用せられているが、そこでは明らかに專稱佛名の證文として示されているのである。見佛をば專稱彌陀佛名に歸結している事は明らかである。

先の第一段に於ても、ほぼ見佛の義は示されたのであるが、此處に至りそれは不動の意義付けを得たのである。

見佛が三心必具の稱名の外に無いと云う歸結を導くべ

き本質を示しているものとして、往生禮讃の前序に説かれる三心五念の説が見出される。今助顯の意味に於てその文意を簡単に窺がつて見たいと思う。

禮讃にはその前序に必得往生の法として、三心五念四修の義が説かれている。三心とは云う迄も無く觀經の三心であり、五念は即ち禮拜・讚嘆・觀察・作願・廻向の五念門の起行である。その三心は願生者の心根として深心に歸し、

具<sup>ミ</sup>此<sup>ニ</sup>三<sup>ツ</sup>心<sup>ヲ</sup>必<sup>ズ</sup>得<sup>ル</sup>生<sup>ズ</sup>也<sup>ヲ</sup>、若<sup>レ</sup>少<sup>シ</sup>一<sup>ハ</sup>心<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>生<sup>ズ</sup>。

と三心必具の義を明確にしている。その安心の表現としての五念の起行は、身業禮拜、口業讚嘆、意業觀察憶念の外なく、この身口意の三業が即ち作願廻向の行であると言ふ相に於て示されている。然もその身業は彌陀佛を禮拜する事であり、口業は又彌陀の依正二報莊嚴を讚嘆する外なく、心業も同じく淨土依正二報莊嚴を憶念觀察する事である。然らば此の三業の内容は、いずれも彌陀の依正二報莊嚴に外ならず、而も三業とは願生者の一廻向行を語るものであり、それは三業と云えど唯一行の三面に過ぎない。更に一步を進めて云えば、禮拜・讚嘆なる身口二業の心理内容が憶念觀察であると云えよう。かくて善導の五念門義の焦點は禮拜を讚嘆に包んで、此處に口業讚嘆と心業憶念觀察とに絞られて来る。而もその

内容は共に彌陀の依正二報莊嚴に外ならないとすれば、それは決して二つの業ではなく、唯一業の表裏であることが窺われる。即ち觀察が稱名かの問題は、善導自らの内面の境地に於ては、決して二者擇一の問題ではなく、二つは一つになり、意業憶念觀察は口業稱名讚嘆の内容として、稱名行の中に吸収され盡して、そこに觀察の眞意を満足している。かくて三心が一心に歸し、正念が一行に吸収せられて、ここに専心専稱の純粹一行こそ唯一の正定業として確立せられているのである。以上が禮讃の三心五念の説に於て窺知せられる意義であるが、觀念成就の見佛とは三心必具の稱名の外無しと云う事は、かかる本質問題を内に含んでいるのである。

ともあれ此の一段の文は、前の第一段中の般舟三昧經の「欲來生者當念我名」なる報佛の聲と呼應して、觀經の眼目を明らかにするものである。善導が四帖疏の上に確立した、稱名正定業<sup>〓</sup>行<sup>〓</sup>の義と、必具三心<sup>〓</sup>信<sup>〓</sup>の義とは、觀念法門にあつてはこの二文の上に見出す事が出來よう。即ち第一段に於ては行相を説き、そこに稱名正定業の義を明し、第二段に於てはその利益を説きて、そこにその心相として必具三心の義を確立している。誠に妙を得た所論である。

以上の如く觀經の中心課題である。見佛得忍の問題は

第一段の歸結と相待つて乘佛願力の稱名の中に全く消解し、満足し盡して行く。

次に見佛三昧増上縁の義に續いて說かれる攝生増上縁と證生増上縁の二義は、先の見佛三昧増上縁から開かれた處の往生の利益である。從來前三増上縁を現益、此の二増上縁を當益と分つて見ようとするが、この五種増上縁が唯一行の利益である事を知れば、そうした分類は却つて問題を不明瞭にすることとなる。むしろこの願力攝取の往生の確證こそ、稱名見佛の具體相として見らるべきである。既に往生と見佛との相即性に就ては、第一段に於て見た處であるが、稱名とは願往生者の正定業であり、その行が内に見佛の徳を具すると云う事は、必得往生の確證を得る事であり、即ち得生想に外ならない。「衆生稱念必得往生」とは亦善導の力説する處である。

以上の如く五種増上縁は、唯、願彼佛力の稱名の利益として、内に感得する見佛得忍の想に外ならない。換言すれば見佛とは願往生者の得生想としての、稱名行の内景である。かくて第一段と第二段とは、相照應して觀經の玄意を明らかにせんとするものである事が領解せられた。

最後の第三段は三問答を以て、信誨の得失、念佛の超勝性を示し、最後に懺悔滅罪の法を説いて、木槌經の文にそえ行往坐臥、時處諸縁をえらばざる稱名念佛の一行

を、只管、勸勵する事を以て全文を結んでいる。結局この一段も觀經の流通の意に應じて、稱名一行を勸めるより他意なしと見て誤り無いであろう。以上は觀念法門の全般を概括的に檢討して行く事により、その性格を明らかにせんとしたのである。尙、細部にわたり考察するならば、更に種々の問題を見出すことが出来るであろう。

併し此の試論に於て私が試みんとした事は、決して觀念法門に對する從來の見方を否定しようとするものではなく、むしろそれらの所論を受けて、更に善導の意圖する處を推考したに過ぎない。それ故決して此の書の實踐規範的意義を輕視するのでは無く、それが實踐規範的意義を有すればこそ、實證的觀經疏としての此の書の獨自性を知り得るのである。唯、既に見て來た如き意味に於ける觀經疏としての性格を、領知することが出来るならば、むしろ實踐規範的性格は、その觀經疏としての性格の中に包まれるものとなるであらう。

ともあれ四帖疏と觀念法門とは共に觀經疏と云う意義に於て照應さるべきものであり、それを以て自他共に、觀經の玄意を領受せんとする善導の願いが、當時の支那佛教の理想主義的觀念性を破り、正しく自己を「機」として佛教本來の實踐的宗教性を回復せしめた事を思い、そこに善導の歴史的使命が窺われるのである。